

2024大会
特別誌

2024大会
最優秀賞受賞者
三分野ゴールド制覇賞受賞者から
次なる挑戦者へのメッセージ！

特許検索競技大会 Patent Search Grand Prix

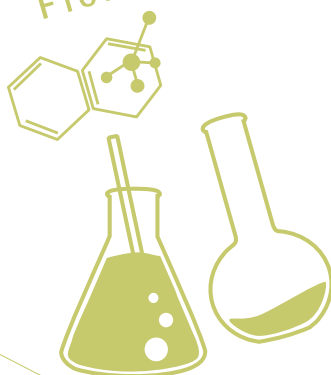
Mechanical
Field



Electrical
Field



Chemical and
Pharmaceutical
Field



本誌発行にあたって

特許検索競技大会は、2013年より工業所有権協力センター(IPCC)となって以降、年々参加者が増え、特許調査のスキルを測ることのできる唯一の大会として皆様から愛されていることは大変喜ばしいことです。新型コロナウイルス感染症の影響で開催中止やレベル認定が行えない年もありましたが、2021年からはリモート開催をスタートし、2022年度からはレベル認定を再開、また2023年度からは会場開催も復活しました。そして2024年度は5年ぶりに団体の部を開催することが出来ました。また、スチューデントコースは企業知財初心者の方等、学生以外にも広く展開するために2024年度より名称をファーストステップコースに変更しました。

会場型とリモート型のハイブリッド形式も定着し、2024年度はファーストステップコース(旧称スチューデントコース)436名、アドバンストコース306名の方にご参加いただきました。2024年度のゴールド認定者は7名となり、その中で全分野(電気、機械、化学・医薬の三分野)でゴールド認定を受けた三分野ゴールド制覇賞が3名生まれています。

今回は、最優秀賞及び三分野ゴールド制覇賞を受賞された4名の方々にお集まりいただき、特許検索競技大会への意気込みや日頃のスキルアップに向けた取り組みなどについてお話を伺いました。示唆に富むお話を伺うことができましたので、日頃特許検索業務に当たられている方々、また今後本大会でゴールド認定を目指される方々のご参考に供するため、その内容を本冊子にまとめました。是非ご一読いただき、ますます多くの方々に本大会にチャレンジしていただけることを願っております。

特許検索競技大会2024実行委員会

委員長 金澤 祐孝

【株式会社IHI 技術開発本部 知的財産部】

特許検索競技大会

日本で唯一、特許調査の実務能力を評価する大会

大会には、学生や企業の研究者等、知財業務初心者向け問題のファーストステップコースと、特許調査に必要な知識・技能を有し、特許調査業務等を実施しているプロ向け問題のアドバンストコースの2コースがあり、レベルに応じてコースを選択することができます。

成績(採点結果)が一定のレベルをクリアした方には、認定証を交付します。

学生・研究者等初心者向け
ファーストステップコース
● 認定

上級者向け
アドバンストコース
3 レベル

- ゴールド認定
- シルバー認定
- ブロンズ認定



会場風景



特許検索競技大会 2024 最優秀賞・三分野ゴールド制覇賞受賞者

最優秀賞

藤田 有里 Yuri Fujita

アイ・イー・シー株式会社 > 化学・医薬分野

(敬称略)

新卒で化学メーカーに入社し、研究をする中で特許調査を経験。その後、知財部署で特許調査に従事。

質問：2021年に初めて大会に参加されましたが、短期間で最優秀賞を受賞できた秘訣を教えてください。

大会特別誌の受賞者インタビューや過去の受賞者の著書等を参考にすることで、自分なりに問題を効率的に解く方法を研究しました。また、前回大会での失敗を振り返り、その対策を立てて大会に挑んできました。



三分野ゴールド制覇賞

掲載順序は50音順

鈴木 倫之 Tomoyuki Suzuki

デクセリアルズ株式会社 > 機械分野

大学では生物学、有機化学、大学院では高分子を専攻。情報処理関連会社を経て、特許調査に従事。

質問：集中力を維持するためにどのように工夫していますか？

長時間にわたる試験であるため、まず初めに全体的な問題構成を把握し、おおよその時間配分をイメージしました。解答中にも区切りの良いタイミングで残り時間を確認し、必要に応じてペースを調整することで、焦りを抑えながら安定した集中力を維持することができました。



堤 奈緒子 Naoko Tsutumi

トヨタテクニカルディ

ベロップメント株式会社 > 化学・医薬分野

大学の講義で知財について学んだことがきっかけで特許調査の道へ。3年ぶりに特許検索競技大会に参加。個人の部だけでなく、団体の部第1位としても表彰。

特許検索をしていて充実感を感じる場面はどんな時ですか？

特許検索による的確な情報提供は、企業の知財活動を支える重要な仕事です。その成果がお客様の意思決定や事業展開に貢献し、「助かりました」、「ありがとう」といった言葉をいただけたとき、自分の仕事の価値を実感し、大きな充実感を覚えます。



山中 崇行 Takayuki Yamanaka

株式会社ブラン

> 機械分野

特許調査との出会いは大学院時代のアルバイト。研究開発から特許調査の道へ。特許調査のセンスを追求中。

良い調査をするために重要なことは何ですか？

調査の目的を間違えないこと。調査が目的なのではなく目的のために調査をするのだから、良い調査のあり方は目的によって変わってくるはず。調査依頼者の目的に対して調査をするのだということを心掛けています。



2024 ゴールド認定者との座談会

2024大会最優秀賞の藤田有里氏、三分野ゴールド制覇賞の鈴木倫之氏、堤奈緒子氏、山中崇行氏をお迎えして、大会実行委員長の金澤祐孝氏（当時）、IPCC副理事長の小柳正之が、特許サーチャーとしてスキルをどのようにして磨いてきたか、特許検索競技大会をどのように活用してきたのかなどを、じっくり伺いました。

過去問を活用、制限時間へどう対応するか

小柳：みなさま、この度は最優秀賞及び三分野ゴールド制覇賞受賞おめでとうございます。本日は、大会で優秀な成績を取られた皆様に大会や特許調査、普段の業務等についてお伺いしたいと思います。

まずはじめに、今回の大会に向けてどのような対策をされてきたか、お伺いできますか？

藤田：まず大会特別誌で受賞者が語られている、問題を解く順番やコツを参考に、効率的に解くための研究を行いました。また、大会だけでなく実務にも役立つため、過去の受賞者の著書やブログ、特許調査に関するYouTube動画等も参考にしています。もちろん、前回大会での失敗の振り返りも大切です。さらに、いろいろな技術分野の問題に対応するため、実際の特許出願で審査結果が出ているものを事例に勉強しています。



鈴木：日頃から頭の中で検索の方針について筋道を立てて、きちんと説明できるようにしておくことを意識しています。特に、問2については、限られた時間内で、戦略をポイントを絞って書かなければならないため、考えをまとめる技術が大切だと考えています。



山中：大会直前に過去問を数回取り組む程度で、特別な対策はしていません。ただし、大会は普段の業務と異なり、時間制限がある点が特徴的です。特許調査では、試行錯誤して筋が悪ければ改めて検索式を作り直すのですが、大会では最初に良い結果が出ないと焦ってしまいます。そこで、日々の業務でもだらだらとした検索にはならないようにすることを心掛け、制限時間に慣れるように意識しています。

今回、三分野ゴールド制覇賞を受賞することができましたが、実は問2の検索式を途中で作り直したため、出来としてはこれまでゴールド認定を取得した中で、一番悪かったです（笑）



堤：大会に向けての対策としては、他の方もおっしゃっていましたが、制限時間内に終わらせる練習をしています。所属組織では、以前は社内で大会の予選会があり、その通過メンバーで勉強会をしてスキルアップを図っていました。どうしても検索の仕事は個人商店化しがちになるので、勉強会が互いのスキルを共有する機会となっています。個人的には、化学・医薬分野の過去の問題にトラウマがあり、社内の化学・医薬分野のゴールド受賞者に検索式をチェックしてもらったりしています。

なお、コロナ禍以降はリモートでも大会に参加できるようになったため、社内の予選会は廃止し、勉強会への参加、大会を受ける機会を全員に開放しました。このような形で社内全体のスキルアップの機会として大会を活用させて頂いております。

問1は時代のトレンドを反映も、予測困難

小柳：今回の出題への感触はいかがでしたか？

鈴木：問1（共通分野）の時事問題は予測が難しかったですね。一方で、問2・問3（選択分野）はある程度傾向があり、普段行っている業務の延長線上にある印象です。

山中：問1は毎年手を替え品を替えて出題されていますね。法律的な要件など、サーチャーにもここまで求められるのか、との印象を持つこともあります。特許マップについては解釈が悩ましいですね。

堤：問1で特許マップが大会の問題として出題されたことに、時代の流れを感じました。柔軟にその時々トレンドが取り入れられている印象です。設問自体は、考えを促すような内容だったり、問3では、以前のように解答の数がわからないものを解答させるのではなく、最近では進歩性の組合せを問うような設問となっており、「親切」な問題と感じました。基本がしっかりできているかどうか評価されると思っています。



実務経験により対応分野を広げる

小柳：三分野ゴールド制覇賞を受賞された皆様は、ご自身の得意分野以外の分野でも好成绩を取られていらっしゃると思いますが、どのような苦労がありましたか？

鈴木：これまでいろいろな技術分野を実務で担当してきたので、苦手な分野はありません。大学では生物系学科、その後、有機化学の研究室に入り、大学院では高分子を専攻し、その後、情報処理関係で就職し、調査会社に転職しました。大会での選択分野は、2013年に電気分野でゴールドを取得後、以降、化学分野、機械分野を順番に受けて、2019年に化学分野として今回、機械分野でゴールド認定を受けました。精通していない分野であっても、すばやく予備検索を行うことで当たりをつけて問題を把握して、FIやFタームで絞り切れない場合はキーワードを適切に使用して対応しています。

山中：もともとは半導体プロセス関連を専門にしていたのですが、今は調査実務として幅広い分野を担当しており、他分野についての苦手意識や抵抗感はありません。その分野の従来技術などをきちんと把握・整理することができれば、そこまで苦労なく対応できると考えています。なお、かつて調査会社に所属していた時に、長く在籍している方から、「上達するかどうかは結局はセンスの有無。」と言われました。そのセンスをなんとか言語化できたら良いのですが。



堤：私はIPCCが大会の主催者となった2013年に初参加し、2016年に電気分野、2018年に機械分野でゴールドを取得、そして今回、ようやく化学分野でもゴールドを取得することができました。2016年に最優秀賞をいただいた際、若さゆえに「三分野制覇」を宣言しましたが、年々4時間の集中を保つことが辛くなる中、化学分野での達成を急ぐ気持ちが強まっていました。

実は初参加の2013年も化学分野を選びましたが、マラリアワクチンという未経験の医薬技術に動揺し、惨敗した苦い思い出があります。当時は「化学分野は素人が挑むべきではない」と感じましたが、後に保管していた評価結果を見返すと、問2では得点出来ていた一方で、問3に手が回っておらず、時間配分のミスが敗因だったと気付きました。

その後は、初見の技術にも冷静に対応することを心掛け、今ではどの技術分野でも苦手意識はありません。実務でも幅広い分野を担当してきましたが、特許検索における基本的な考え方は共通していると考えています。重要なのは「初見でその技術の理解ができるかどうか」であり、どのような技術にも柔軟に取り組めるのが、理系出身者の強みだと感じています。

小柳：藤田さんは今後、三分野ゴールド制覇に挑戦してみようと思われますか？

藤田：三分野制覇まではわかりませんが、他分野にもぜひ挑戦してみたいです。私はやはり専門分野が影響すると思っており、他分野の技術的バックグラウンドをどう身に着けるのが、課題です。

AIは補助ツール、人間の判断能力が問われる

小柳：現在、AIの開発が進み、特許調査の分野にも徐々にAIが広がつつあります。その中で、特許検索のプロである皆さんは、AIの活用について、どのようにお考えですか？

藤田：AIについては、実務で教師データ作成の依頼などを受けたことがあります。現時点では、調査の補助ツールとしてAIは有効だと感じています。ただし、社内で開発したものでなければ、処理がブラックボックス化している点が気になります。AIが導き出したものが、妥当な結果であるかどうかの判断やチェックはやはり人間でなければならず、その点が重要だと考えています。全てをAIに丸投げすることはできないのではないかと考えます。



鈴木：A I は、使えるところには積極的に使っていく必要があると思います。例えばインターネット上の情報を整理するのにA I は有効です。特許公報や、生成A I のデータベースに蓄積されていない情報をどのように抽出するのは課題だと思います。また、人の目で最終的に確認することも重要です。なお、A I であっても条件付けをするのは人間なので、例えば生成A I におけるプロンプトの作成には、これまで培ってきた検索スキルを役立てることができるのではないかと考えています。



山中：調査業務の中で、いずれA I に置き換えられる部分が出てくるのは止められない流れだと思います。明細書も長文化化しており、人間が目視で読み込むにも限界があります。ただし、A I を業務で使う場合、精度以前の問題としてA I が信用できるものなのか、という点が課題です。また、検索クエリが外部に漏れるリスクは考えなければなりません。

A I が「ない」と判断したものをそのまま信用することは、私はまだできません。社内で閉じたシステムとして構築されたA I や、類似度上位をスクリーニングする用途では使えるとは思いますが。

堤：A I は調査でもどんどん活用していくべきだと考えています。調査の専門家ではなく、研究開発の立場の方が簡単に検索できるようになり、例えば出願戦略の検討に役立てられるようになるのは非常に良いことです。ただし、プロセスをどこまで信用できるのか、という点は課題で、特にクリアランス調査のように最終的な責任が人間に求められる場面では、人手で目視する業務は今後必要であると考えています。一方で、大まかに全体の傾向を見出したり、I プランドスケープのようなデータ分析ではA I が有効に使える場面が多いと感じています。



I プランドスケープと特許調査のプロ

小柳：I プランドスケープの話題が出ましたが、このトレンドについて特許調査のプロとしてどうしてお考えをお持ちですか。

藤田：I プランドスケープの定義自体も定まっていないと理解しています。一方で、顧客側が持つ問題意識に対して、調査会社として何かしらの助言ができるのではないかと考えています。

鈴木：I プランドスケープは、使用する目的がはっきりしているかどうかにかかっているのではないかと思います。課題設定によって、分析の方法も違ってきます。

山中：外部で調査をする立場としては、いわゆるI プランドスケープまで入り込むことはありません。経営戦略に直接に接する立場の方でなければうまく生かせないのでは、と考えています。

堤：知財情報は企業の情報のごく一部でしかありません。知財情報だけでなく、経営情報も使って分析しなければ、経営に資するものにはならないのではないかと考えています。特許検索のプロがI プランドスケープに携わるのであれば、問1で出題されたような特許マップを読み解く能力はもちろん、知財情報以外の、例えば経営情報をどこから収集して、どう読み解くのかの能力も身に着けることが重要になると思います。



ニーズに即した難易度・設問がポイントに

小柳：特許検索競技大会を今後より良いものにしていくためのアイデアはありますか？

藤田：私は2021年のリモート開催がスタートしてからの参加であり、その後も毎回リモートで参加しています。団体の部もリモートで参加できるようになれば、参加者が増えるのではないのでしょうか。また、アドバンスコースはスキルアップセミナーを受講できますが、ファーストステップコースについても講習会を設けて体系的に特許調査を学べるような仕組みがあれば、モチベーションの向上につながるのではないかと思います。

鈴木：スキルアップセミナーは、現在はオンラインになっていますが、コロナ禍以前はリアル開催でセミナー後は交流会が開催され、参加者にとって良い交流の場になっていました。例えばハイブリッド開催として、ファーストステップからも参加できるようにして、学生と企業や特許調査のプロが交流できるような、マッチングできるような場になるといいと思います。



山中：「競技大会」と銘打つからには、順位をつけるからこそ盛り上がるのですが、1位を決めるには難易度を高くする必要があります。しかし認定の機会と考えると、難易度が高すぎる問題は出題しづらいところが難しいところですね。また、以前に比べて、出題される範囲が広がってきており、初めて参加した方は出題範囲の広さに面食らってしまうのではないかと思います。どこまでの範囲のスキルを参加者に求めるのか、難易度の設定が今後の肝になるのではないかと思います。

堤：大会は実力を測る場としては非常に良い機会です。そこは変わらないでほしいところです。基礎ができるからこそ、応用ができるようになります。一方で、A I の発展などにより、特許調査を取り巻く環境は大きく変化しており、今後はプロンプトの作成や研究開発者とのコミュニケーションなど、より上流の工程における考える能力が求められるようになります。その時代のニーズに合わせた要素を追加しながら、少しずつ変わっていくことを期待しています。

金澤：問題作成をする立場としては、A I の進歩が常に気になっています。A I で簡単に解答されてしまうのではないかと、また、そうなったとき、出題内容をどう変えていく必要があるのか、とよく考えます。また、I P ランドスケープは解釈がポイントなので、答えが一つになるような問題を作ることが非常に難しいです。今後、さらにいろんな角度から工夫していきたいと思っています。



今後参加される方へのメッセージ

小柳：最後に、大会参加者へのメッセージをお願いします。

藤田：大会で出題される問題は、実務に即したものとなっており、実力を客観的に把握する良い機会となっています。参加することでスキルが向上していることを実感していますので、実力アップを目指す方はぜひ大会に参加していただきたいです。



鈴木：自身のスキルがどの程度のかを測定し、把握することで、はじめて向上につなげることができます。ぜひ腕試しとして大会に参加していただきたいです。

山中：実務に即したとても良い問題となっていますので、若い方にもどんどん受けていただきたいですね。

堤：私は特許検索競技大会に育てられたと言ってもよいと思っています。実務で学び、大会でそれを吐き出す、というサイクルで、結果のみに一喜一憂せず、どこがダメだったかを振り返って次に臨んできました。「継続は力なり」です。

小柳：運営側として、今後も大会の魅力をより高めて、より多くの方々に参加していただけるよう、取り組んでいきたいと思っています。本日は有意義なお話をありがとうございました。

一般財団法人 工業所有権協力センターでは、
公益目的事業として特許検索競技大会を主催しております。



〒135-0042
東京都江東区木場1-2-15
深川ギャザリア ウエスト3棟
企画室企画部 電 話 03-6665-7877
メール kikaku-bu@ipcc.or.jp



特許検索競技大会特設サイト

<https://www.ipcc.or.jp/contest/>



2025.06